

『王弟殿下の甘い執心』

著：名倉和希

ill：蓮川 愛

「お疲れさまでしたー」

「おう、お疲れー」

午後六時半、春輝は先輩社員たちに交じって、勤務している会社のビルを出た。会社はこの四月に新入社員を採用しなかったため、昨年と変わらず春輝が一番下っ端だ。先輩たちの半分は既婚なのでこのまま帰宅する。残りの半分の独身者たちは、その日の都合でいっしょに食事に行ったり行かなかったりしていた。春輝は自炊がまったくできないので、だいたい外で食べてから帰る。

今日の外出組は、春輝を入れて四人いた。どこへ行くかと相談しながら地下鉄の駅までぞろぞろと歩いていると、先頭を歩いていた先輩がいきなり足を止めた。あやうくぶつかりそうになった春輝が「どうかしたんですか？」と尋ねると――。

「Excuse me」

どこかで聞いたことのある、深みの心地よい低音ボイスが先輩越しに聞こえてきた。

「Haruki Katayama」

唐突に名前を呼ばれて驚いている春輝を、先輩たちが一斉に振り返る。

「おまえに用事みたいだ。知り合いか？」

「ちょっと尋常じゃない雰囲気のお兄さんたちだが……」

戸惑いながらも先輩たちが春輝の前から引いていき、視界が開けた。数メートル先に長身の男が立っていた。一目でわかる。三日前の土曜日、ホテルの中庭で春輝を女と思いこんで口説いてきて、煙草を取り上げた奴だ！

今日も憎らしいほどに高そうなスーツに身を包み、両脇と背後に合計四人ものボディガードらしき屈強な男どもを従えている。夕暮れのオフィス街に不似合いで異質だった。ドラマの撮影か？ と疑ってしまうほどに。

通り過ぎていく人たちが胡散臭そうな目を向けていることに気付いているのかいないのか、男は堂々と立ち、ニッと笑った。感じのいい笑い方ではない。春輝は嫌な気分になった。

一日真面目に働いてほどよく疲れているし、腹ぺこだ。これから美味しいメシを食べに行こうとしていたときに、面倒くさい相手に捕まってしまった。春輝の素性を調べ上げてここまで来たのだろう。それ自体は驚きに値しない。春輝はべつに素性を隠しているわけではないから、その気になれば調べることは可能だ。

このぶんだと春輝が日本語で怒鳴った言葉の内容も理解したのだろう。男の目には好戦的な光が満ちていた。

伯母の結子にはあの日のうちに電話をした。パーティに出席していた外国人の男に中庭でナンパされたこと、馴れ馴れしくて不愉快だったので感情的になってしまいスマートに断れなかったこと。いくぶん自分に都合のいいように言葉を選んだのは否めないが、嘘ではない。

もし片山流にクレームが入ったら申し訳ない、と謝っておいた。結子は笑って、「うちのお弟子さんたちが営業先のヒヒジジイに口説かれるのはよくあること。気にしなくて大丈夫よ」と言ってくれた。

それでも心配だったので、なにかあったら連絡をしてほしいと頼んでおいた。今日まで結子から連絡はなかったので、あの気障なセレブ男はそれほど狭量な人間ではなかったのかとホッとしていたところだったのだが……。

『やあ、また会ったな。このあいだとはずいぶんと雰囲気がちがう』

気さくな口調で話しかけてきた。長い足で一步、間合いを詰めてくる。靴はあいかわらずピカピカに磨かれていて、灯りはじめた街灯が反射していた。

『私を覚えているか？』

春輝は答えなかった。じっと男を見上げて——悔しいが男は春輝よりも二十センチくらい背が高く、たぶん百九十センチ以上ある——口を噤んでいた。

『あのとき君が私に投げつけた言葉の意味は、だいたいのところを理解した。性別を間違い、煙草を取り上げたのは、たしかに私が悪かっただろう。けれど、あのときの君は完全に女だった。あんな格好をして勘違いさせた君も悪いと思う。私を侮辱した言葉を撤回し、素直に謝罪するなら、すべてを水に流して——』

この男はやっぱりバカだ。どこの偉い人が知らないが、相手にしたくない。スルーしよう。

「アイキャントスピークイングリッシュ」

春輝はカタカナ英語できっぱりと言い切ってやった。男がきょとんとした顔になる。

「先輩、行きましょう」

成り行きを見守っていた先輩たちの手を引き、とつとと地下鉄の入り口へ向かう。「いいのか？」と小声で確認してくる先輩たちに、「いいんです」と頷いて小走りになった。

『おい、ハルキ・カタヤマ！』

フルネームでもう一度呼ばれたが、春輝は無視した。地下鉄の構内までは追いかけてこなかったため、そのまま逃げ切る。先輩たちはしきりに背後を気にしていたが、春輝は「メシ食いにいきましょう」と気持ちの切り替えを促した。

「まあ、おまえがそう言うなら……」

「どこの店に行く？ 片山はなにが食いたいんだ？」

深くは追及しないでくれる先輩たちは大人だった。春輝はにっこりと笑顔を作り、「天津飯が食べたい」と遠慮なく希望を告げる。お手ごろ価格の街の中華料理店へ行くことになった。

(あの男……)

長身の気障男。追ってはこなかったが、このまま春輝のことを忘れて消えてくれるとは思えない。最悪のパターンは、あの男が春輝の父親のことまで調べ上げていた場合だ。異母兄たちに連絡を取られてしまったら、春輝はあの男の前に出て行って謝罪しなければならなくなる。

(嫌だよ。どうして俺が謝るんだよ。あいつが悪いのに)

どうか自分のことなんかとっとと忘れてくれ、と神に祈る。天津飯は美味かった。

だが春輝の願いも虚しく、翌日、会社の前にまたあの男が立ち、春輝の勤務時間が終わるのを待っていた。オフィスに乗りこんできて仕事の邪魔をしないという常識だけはあるらしいが、ボディガードともども歩道を塞いで通行人の邪魔になっているし、春輝の先輩たちを不安に陥れ、食事に行くのを阻んでいる。

『ハルキ・カタヤマ、話がある。すこし付き合え』

男はごくゆっくりと、聞き間違えできないほど明確に発音して呼びかけてきた。さすがに二日目ともなると、「アイキャントスピークイングリッシュ」で逃げるのは無理っぽい。

直接的な暴力には訴えてきていなくとも、男は昨日よりも不機嫌そうで、いつでもボディガードたちに春輝の拉致を命じられる雰囲気だった。もちろんそんなことをしたら目撃者多数であつという間に通報されるだろう。しかし、どこの国の人間か知らないが、もし大使館にでも連れこまれたら厄介だ。

『俺、いまからメシを食いにいくところなんだけど』

いつまでも黙っていては埒があかないので、仕方なく春輝は英語で返事をした。

『なんだ、母国語以外にもしゃべれるんじゃないか。英語なんて簡単な言語すらマスターできないバカかと思った』

フン、と男は鼻で笑う。イラッとしたが顔には出さないように我慢した。

『これから食事なら私と話をしながらでいいだろう。乗れ』

男が指さしたのは路肩に寄せて停車していた馬鹿デカイサイズのセダンだった。日本のナンバーなので自国から持ってきたわけではなさそうだ。リムジンだろうか。こんな車、日本にあったのかと妙な感心をしてしまう。細い裏道は通れなさそうだ。

『早く乗れ。店を予約してある』

『はいはいって乗るわけがないだろ。俺、あんたのこと知らないんだけど。見ず知らずの男の車になんの疑いもなく乗るほど非常識じゃない』

男の凜々しい眉がぴくりと反応して春輝を睨んできた。

『どうあっても私の誘いを断ると言うのか。私は君の兄をビジネス上知っている。今回のことはプライベートなのでわざわざ連絡を取っていないが、した方がよかったか？』

(やっぱそうきたか……)

仕方がない、と春輝はため息をついた。やはり素性をとことん調べ上げられているようだ。けれど異母兄にはまだ連絡を取っていないらしいのはありがたい。できればこのまま彼らにはなにも言わないでほしい。ここで誘いに応じるのが得策だろう。

後ろにいる先輩たちに「ごめんなさい。今日はちょっと」と、ここで別れることを告げる。

「えっ、こいつについていくのか？ 大丈夫か？」

「兄の知人でした」

嘘ではない。英語がわかる先輩が「そうみたいだな」と頷いたので、ほかの先輩たちも納得してくれた。「じゃあな」と手を振りつつ、先輩たちは地下鉄の入り口に消えていく。

『車に乗れ』

三度、横柄に命令してきた。男が顎で合図をすると、ボディガードの一人が車のドアを開けた。やはり車はリムジンだったようで、天井にミニサイズのシャンデリアが煌めき、L字に白い革のソファが設えられているのが見える。思わず、「なんだこりゃ」と呆れた声が出てしまった。

得意げな表情をしている男の前を通り過ぎ、車に乗りこむ。すぐ男も乗りこんできて、春輝はできるだけ反対側に身を寄せた。ボディガードたちは一緒に乗らないようで、一人は助手席、残りは別の車らしい。

『まず自己紹介をしよう』

男が席に深く座り、長い足を組む。またもや革靴にシャンデリアの明かりが反射して、眩しいくらいにキラキラした。どれだけ磨けば革靴にこんな輝きが生まれるんだ。

かすかな振動が伝わってきて、車が発進したのがわかる。

『私はジェフリー・オルブライト、中央アジアにある、石油産出国の王族だ』

身分が想像通りすぎて笑えない。本当に王族だった。機嫌を損ねたら異母兄たちに叱られるどころではなく、国に損害を与えてしまうかもしれない。この男が異母兄にクレームを入れてくれなくて本当によかった。

『俺は、まあ、もう知っているみたいだけど、片山春輝。あんたは異母兄たちとビジネス上の繋がりがあるみたいだが、俺は東大路グループとはまったく関係ない仕事をしている。切り離して考えてくれるとありがたい』

『つまり、君の兄であるカズオ氏に連絡はするなということかな？ タカシ氏は？』

わざわざ確認してくるのは、言質を取るためだろう。いやらしいビジネスマンだ。異母兄たちが春輝の触れられたくない部分だと察している。認めたくないが、仕方がない。

『両方だ。あんたが四日前の俺の言動に怒っているなら、謝罪する。ごめんなさい。だから彼らにはなにも言わないでくれるとありがたい。母方の伯母が箏の片山流家元で、異母兄からは個人的に運営資金を援助してもらっている。怒らせてそれを打ち切られると困る』

『なるほど。逆らえないというわけだ。四日前のパフォーマンスのやり方は、君としては不本意なものだったと考えていいのか？』

女装して演奏していたことを指しているのだろう。演奏後の中庭での一幕から、この男はそう思ったらしい。当たりだ。なかなかどうして、ちゃんと人を見ているじゃないか。

『俺に女装趣味はない。まあ、女の格好が似合いすぎるのがいけないんだろうな。異母兄たちは面白がっている。騙されて、うっかりナンパしてくる男がいるくらいだから』

ちょっと揶揄する口調で言ってみたら、ジェフリーはむっつりと黙りこんだ。ずいぶんと感情が面に出る男だ。

『あれは間違えても仕方がない。私の目が悪いわけではない。キモノ姿の君はとても美しかった。色とりどりの花の模様は君に似合っていたし、演奏者の中で君が一番上手かった』

『え、俺が一番上手かった？』

四日前は容姿しかほめられていない。意外な一言に、つい身を乗り出して聞き返してしまう。

『君が一番だった』

『聴き分けられたのか？ ソロパートなんて、ほんのちょっとだけだっただろ』

『私の耳を馬鹿にするな。これでも幼児期からさんざん一流の音楽に触れてきたのだ。演奏者のレベルくらいわかる』

ジェフリーは当然といった口調で続ける。

『君は家元の身内だ。幼いときからいままで、膨大な時間をレッスンに費やしてきたのではないか？ 音楽が体の一部になっているように感じた。素晴らしかった』

手放しの褒めように、春輝は俄然いい気分になった。この男のいくつかのマイナスポイントが帳消しになり、春輝の中でジェフリーは一気に『いい人』レベルへと格上げされる。

『ありがとう。そんなふうには言ってもらえて嬉しい』

笑顔でお礼を言うと、ジェフリーは一瞬だけ動かなくなったが、すぐに視線を逸らして『本当のことを言ったまでだ』とぶっきらぼうに返してくる。

『ジェフリーはいくつ？』

『三十六だ』

『へえ、若く見えるね』

初対面するとき、もしかして四十歳くらいかと思ったことは黙っておくことにする。

『体、鍛えてるの？』

『運動は欠かさないようにしている』

『スタイルいいね。カッコいい』

ちょっと持ち上げてみたらジェフリーは口元を緩め、ほどほどに筋肉がついた長い足をわざとらしく組み替えた。よしよし、いい調子だ。四日前の春輝の暴言を、なんとかなかったことにしてもらいたい。

かすかな振動とともに車が停まった。ドアが外側から開けられる。ボディガードが周囲に視線を飛ばしながら、『どうぞ』とジェフリーに声をかけた。到着したのは某有名グルメガイド本で星をもらっているフレンチレストランだった。

簡単には予約が取れないことで知られている店のはずだが、産油国の王族はわりと簡単に取れてしまうらしい。

春輝は訪れたことがなく、従業員に奥の個室へと案内されていくあいだ、物珍しくてきょろきょろと視線を巡らせる。個室は広かった。十人は座れそうな大きなテーブルに二人だけ。白いクロスがかけられたテーブルには上品な光沢の美しい食器とカトラリーがきれいに並んでいる。テーブルマナーは母に叩きこまれているので不安はない。

席についてすぐ、ソムリエがワインリストを持ってきた。ジェフリーだけでなく春輝にもリストを見せてくれる。ワインについては基礎知識くらいしかない。どれが美味いんだろう、と銘柄やら年代やらを眺めていたら、ジェフリーがニヤニヤと笑いながら春輝を見ていた。どうせワインの善し悪しなどわからないんだろう、とでも言いたげだ。

その通りなので腹は立たない。春輝はリストを閉じて、ソムリエに返した。

『あんたが選んでよ。よくわからないから』

『……素直だな』

意外そうな顔をされた。そんなに春輝は意地を張りそうな子供に見えるのだろうか。

『こんなところで知ったかぶりして恥をかく趣味はないってだけ』

『そうか。では私が選ぼう。ワインは好きか？』

『酒ならなんでも好きだよ』

『そうか。ならば好きなだけ飲むといい』

『えっ、いいの？ そんなこと言われたら飲んじゃうよ？』

『飲んでいい』

『マジで？ 嬉しい！』

春輝は華奢な体型と童顔のせいか小食でアルコール耐性がないと見られがちだが、じつは大食いのウワバミだった。いつか財布の中身を気にせず好きなだけ飲んでみたい、というのが夢なのだ。

たぶんこのときの春輝は、輝くような満面の笑みになっていただろう。

『ありがと！ 俺、あんたみたいな器のおっかい男の人、大好き！』

『……そうか』

ジェフリーがまたもやぎこちなく視線を逸らした。もしかして照れてんの？ このオヤジ。なんて心の中で呟いたことはおくびにも出さない。

星付きフレンチレストランの料理は最高だった。そしてジェフリーが料理に合うようにと選んだワインも最高だった。広いテーブルにワインの空き瓶とグラスが並ぶ様は壮観で、春輝は給仕係が片付けようとするのを制して、そのままにしていた。

「やだもう、めっちゃ美味しい〜」

ほどよく酔っ払った春輝は、お代わりした鴨のローストをつまみにして、上機嫌で最高級ワインをぶどうジュースのように飲み干した。

『その細い腹のどこにそれだけの料理とワインが入っていくんだ？』

『えーっ、好きなだけ飲んでいいって言ったじゃない』

『それは言ったが……』

『えーっと、どこまで話したっけ。そうそう、母さんのお弟子さんでキミ子さんっていうおばちゃんがいたんだけど、ちょっとメタボ気味の体型で——って、メタボって知ってる？ 肥満気味ってこと。すごく優しくて可愛い感じの人で子供のころの俺はけっこう懐いていたんだよね。でもさ、うちの教室に練習に来るたびに正座で足が痺れちゃってさあ、ほら、箏って正座して弾くじゃない。太っている人って体が重いから、痺れるのが早いんだよ。そのおばちゃん、毎回痺れてて、練習が終わっても立てなくて、悶絶するの。その悶絶の仕方が面白くてさあ。ほら、こんなふうに』

春輝が真似してやってみせると、ジェフリーは声を上げて笑った。屈託のない笑い声に、春輝への怒りはもう感じられない。四日前のことは水に流してくれたようで嬉しい。

何本目かのワインを飲み切ったとき、春輝はふと「いま何時だ？」と気になった。今日は平日で、明日も会社がある。酔っていても、この一年ちょっとでサラリーマンの習慣は身についている。携帯電話を取り出し、時間を確認した。

「ヤバっ、もうこんな時間じゃん。帰らなきゃ」

二十二時を回っている。いまずぐ自宅マンションに戻ってシャワーを浴びて、さっさと寝なければ。春輝は最低でも八時間は睡眠を取りたいタイプだ。遅くとも七時半に起きないと会社に間に合わないの、二十三時半には寝なければならない。

『ジェフリー、ごちそうさまでした』

春輝は頬を酔いに染めた顔でぺこりと頭を下げ、カバンを抱えると立ち上がった。

『待て、帰るのか？ 夜はこれからだ』

『もうお腹いっぱいになったから帰る』

『お腹いっぱいって——』

『明日も会社だもん』

『一日くらい休んでも構わないだろう』

『やだよ。あんたといっしょに消えたところ、会社の先輩たち見てたんだぞ。翌日に休んだらなにがあったのかって心配させちゃうだろ。変に勘ぐられるのも嫌だし』

『私としては勘ぐられるのもやぶさかではないのだが——』

ジェフリーがワイングラスを片手に立ち上がり、春輝の隣の席に移ってきた。青い瞳が近くからじっと見つめてくる。あ、これはヤバいぞ、こいつバイなのかな。

『場所を変えて、ゆっくり飲まないか。とてもいい雰囲気のあるバーがある。世界中のありとあらゆる酒が楽しめるところだ』

『え……世界中？』

ものすごく興味をそそられる。『それどこ？』と聞いたら、ジェフリーが低音で囁いた。

『私が宿泊しているホテルのスカイラウンジで——』

うわ、それダメなやつ。下心ありありじゃん。頭の中で警戒のサイレンがウーウー鳴る。

春輝はすっと立ち上がった。ごめんなさい、日本。体を使った接待は無理。ジェフリーが公私混同しないことを祈るのみだ。

『すっごく美味しかった。今夜は本当にありがとう』

『ハルキ』

伸びてきたジェフリーの手をすりとかわす。しこたま飲んで酔ってはいたが、意識も足取りもしっかりしていた。いくら飲んでも前後不覚になったことはない。二日酔いになったこともない春輝だ。

『明日も仕事なの。もう寝たい。俺、真面目が取り柄の、ただのサラリーマンだから』

ナイロン製のビジネスバッグを胸に抱え、じわじわとテーブルから離れる。ジェフリーがグラスをテーブルに置き、ため息をついた。

『せめて送らせろ』

『大丈夫、まだ余裕で電車が動いてる。じゃあねー』

春輝はそそくさとレストランを出た。

慌てるあまり、一人残されたジェフリーの心情を考える余裕がなかった。

不愉快にさせてしまっただろうか。せっかく四日前のことがうやむやになっていたのに、とあとになってから後悔した春輝だった。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>